

## 第9回 定時総会 会長挨拶

一般社団法人 日本陸用内燃機関協会  
会長 荻田 広

本日はご多用中にも関わらずご出席頂き誠に有難うございます。また平素より、当協会の運営につきまして、格別のご指導・ご支援を賜りここに改めて御礼申し上げます。

一般社団法人陸用内燃機関協会の第9回定時総会開催にあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

まず、私どもを取り巻く日本経済の現況ですが、一言で申し上げれば、「未だ踊り場があり、悪化リスクの重石で回復の兆しが見えない」という状況かと思えます。中国を始めとするアジア新興国や資源国の景気の下振れリスクや、海外経済の不確実性の高まりなどが一番の懸念材料ですが、本来であれば今年度なかばには景気の底入れも期待される状況ながら、消費増税の決着とも絡んで、私共の事業環境は当分目を離せない状況が続きそうです。

次に、私どもの陸用エンジンの生産状況ですが、陸内協では、エンジンメーカー20社にご協力いただき、毎年2回、生産実績と見通しに関する調査結果を発表しております。年度毎の生産台数は、ガソリンとディーゼルおよびガスエンジンの、国内と海外を合わせた総生産台数で、昨年度すなわち平成27年度は1,380万台となる見込みです。この数字は、平成26年度の1,470万台に比べ、率にして6.1%の大きな落ち込みとなります。そして、今年度すなわち平成28年度の見通しは1,417万台で、これは、昨年度比2.7%の増加を予測しておりますが、残念ながら一昨年度比では1.5%ほど届かない台数となっています。何とか持ち直しを期待したいところですが、ここでも厳しい数字が出ております。

次に、昨年度実績を大きなトレンドで見ると、まず、国内生産はリーマンショック明けで大幅増となった平成22年度をピークに、5年連続で減少が続いています。また、海外生産はその平成22年度以来増加を続けて来ましたが、昨年度は6年ぶりの対前年度割れという結果になりました。これにより国内と海外がいずれも減産となり総台数は、3年ぶりの減少という状況です。次に、海外生産比率に関しては、ガソリンは79%で頭打ちの状態が続いており、ディーゼルは平成25年度の28%をピークに減少に転じ、昨年度は26%でした。今年度は輸出も久し振りに105%の伸びを予想しており、ディーゼルでは国内回帰の傾向が見られます。

次に、今年度の当協会の活動方針について若干触れます。平成28年度は、昨年度に引き継ぎ、協会活動の4本柱である、「環境保全への対応」、「技術情報の発信」、「調査資料の公表」、「会員サービスの強化」の4つの課題に対して、それぞれの課題で質の向上と改善に注力して参ります。

例えば、その中でもとりわけ重要となる「環境保全への対応」では、基本はIICEMA国際内燃機関工業会への積極的な参画で、多国間連携による国際基準調和の推進を強化する、としておりますが、今年は中国の次期規制や欧州Stage Vそして米国独自の

規制動向など注視すべき案件が多数迫っており、IICEMA だけの枠組みだけでは会員のニーズに充分応えられない場面も予想されます。陸内協独自の機動的な二国間での情報収集や活動の展開も合わせて検討して参ります。

最後になりますが、今後も我々陸用エンジン業界が世界市場の有力なプレイヤーとしてあり続けるためには、さらなる努力と挑戦を続けてゆくことが重要です。会員各社におかれましては、その高い技術とたゆまぬ研究により、これまで以上に存在感を高められていくと確信しております。陸内協といたしましても、皆様と手を携えて、その責務をしっかりと果たしていく所存でございます。

皆様方の益々のご活躍、ご発展とご健勝を祈念いたしまして、わたくしのご挨拶とさせていただきます。

以上